2016
Vol.15

九大別府病院だより

Kyushu University
Beppu Hospital

② 新年の挨拶
⑧ 九大別府病院 リハビリの歴史
「温研が誇ったフランス人飛行家
—日仏を結んだ大空の縁—」
⑩「おんけん同門会」“あの頃と今”
～大分県社会保険審査委員長　安田正之～
⑫ 採用医師の紹介
⑬ おんけん症例検討会報告
クリスマスコンサート

別府湾

病院の理念・基本方針

理　念

患者さんに満足され、医療人も満足する医療の提供ができる病院を目指します。

基本方針

◆地域医療との連携及び地域医療への貢献の推進
◆プライマリ・ケア診療の充実
◆全人的医療が可能な医療人の養成
◆専門医療の高度化を目指した医学研究の推進
◆国際化の推進
◆生活の質が向上できる医療の提供

患者さんの権利と責務

私どもは患者さんの権利を守り、病院の理念に基づいた、公平で良質な医療を提供することを目指します。

九州大学病院別府病院
Kyushu University Beppu Hospital

新年のご挨拶

九州大学病院
別府病院長　三森 功士

平成28年の年頭に際しまして、ひとことご挨拶を申しあげます。

まず最初に、昨年の9月から12月にかけまして行われました病棟耐震補強工事の件です。未曾有の災害発生の危険性の可能性がある以上、やむを得ない選択ではございましたが、発生した騒音と振動につきまして、特に入院患者さん、そしてご家族の皆さんに多大なるご迷惑をおかけいたしましたことを、心からお詫び申しあげます。最終的な竣工は今春の予定でございますが、病棟に轟音と激震でご迷惑をおかけしてしまう時期は過ぎましたことをお伝えしたいと存じます。

さて、わが国はいわゆる2025年問題とよばれる超高齢化社会を間もなく迎えようとしています。緩やかに国全体で病棟別の機能分化、在宅/療養の充実を求められて参りましたが、昨年はわれわれの属する東部医療圏全体で急性期病床の削減と療養病床の割合増加などについて、大分県福祉保健部の指導のもと別府市医師会を軸に数回、話し合いの場が設けられました。いよいよ現実味を帯びて参りましたが、当院といたしましては、地域医療連携室を中心に基幹病院ならびに開業の先生方との連絡を緊密にさせていただきながら地域の病院としての責務を果たしつつ、市内唯一の大学病院としての役割を認識し、患者さんに一番の恩恵と福音とがもたらされる診療を進めて参りたいと思います。また、大学の臨床研究によって多くの患者さんにとっても救いとなるような、また別府市民の皆さまにとりましても誇りとして感じていただけるような診断・治療法の開発も引き続き推進していきたいと思っております。

すなわち(1)大学病院としての急性期病院としての役割、(2)病院の旗印となる様な高い専門性を有した診療のご提供、(3)地域の先生方との強靭な連携、(4)高齢者特有の疾患に対する診療、(5)治験などの臨床研究の推進、そして(6)基礎研究の世界への発信。今年もこの６つを抱負といたしまして一年間取り組んでいく所存です。

さらに現在、当院では堀内孝彦教授を委員長とする「別府病院再開発ワーキンググループ」を発足し、馬出本院と共に新病院建設にむけての準備を進めているところでございます。その実現にむけて、これからも「自分あるいは自分の家族が病気になったら、かかりたい病院」を合い言葉に、職員一同、家族のように一丸となって頑張りますので、本年も何卒よろしくお願いいたします。

診療科長あいさつ

内　科

九州大学病院別府病院
内科・科長

堀　内　孝　彦

明けましておめでとうございます。皆さんには昨年中は格別のご厚情を賜り感謝いたします。昨年の9月～12月は耐震補強工事にともなう病床の一時的減少で患者さんやご家族の方、近隣の診療所や病院の先生方にご迷惑をおかけいたしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。工事が完了した今年は心機一転、医局員一同診療に邁進いたす決意でございます。どうかよろしくお願い申し上げます。

私どもの内科では、リウマチ・膠原病、血液・腫瘍、消化器、循環器の専門医が九州大学病院の名に恥じないレベルの診療を提供するべく日夜働いております。昭和6年にこの別府の地に設立された九州帝国大学温泉治療学研究所から連綿と続く当内科の伝統と歴史は大切に守りそして後輩にしっかりと伝えて参りたいと思っています。

しかしながらその一方で、変化をおそれずに新しいことにチャレンジすることは大事であります。新しいことへのチャレンジを私どもの今年の目標にしたいと思います。ダーウィンは、「種の起源」のなかで、「最も強いものが生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることができるのは、変化できる者である。」と述べています。社会環境、医療制度の変化に応じて私たちの内科も常に変化していかないといずれは淘汰されてしまいます。失敗するかもしれない、しかしそれでも新しいことにチャレンジするという気概を持って私どもは一つに団結して進んでいきます。今年はいよいよ新病院建設に向けた工程、道筋を決定する大事な一年になります。新病院建設のためには20年、30年先の医療を見据えた私どもの変化も必要になると思っています。さらに大きく飛躍しもっともっと皆さんのお役にたてるようになるために変化を継続して参ります。

大分県全域にたくさんの同門の諸先生方がいてくださることは私ども内科の大きな財産でございます。大変心強く存じます。これからも一層のご指導を賜りたく存じます。皆さんの今年一年のますますのご健勝を祈念いたします。

診療科長あいさつ

外　科

九州大学病院別府病院
外科・科長

三　森　功　士

平成28年年頭に際しましてひとことご挨拶を申しあげます。

さて、まず何はさておき、お詫びを申しあげなければならいことは、病棟耐震補強工事期間中の大騒音と震動であります。患者さんならびにご家族の皆さんには大変ご迷惑をおかけいたしました。このような時期に患者さんを快くお引き受けいただきました基幹病院の先生方、ご開業の先生方には厚く御礼を申しあげます。昨年末をもちまして、激しい騒音が発生する工期は過ぎ、ようやく患者さんをお迎えできるような体制に戻りましたことを御礼と共に謹んでご報告申しあげます。

さて、高齢化社会の到来にそなえて病棟機能の分化が益々進んでまいりますが、われわれ外科は引き続き急性期病棟としてその責務を果たして参りたいと考えております。地域に根ざし開かれた、そして下記の特色をもった診療科として、別府市民はじめ別府と訪れる多くの方のために尽力をしてまいります。

ひとつはキャンサーボードを組織して集学的に癌の根治をめざしています。手前味噌ですが、その構成員が素晴らしいです。堀内孝彦教授にご高配いただいた臨床腫瘍学会専門医、放射線治療専門医、平川雅和診療科長はじめとする圧倒的診断力を有する画像診断医、そして消化器内科および放射線科の内視鏡専門医が力を合わせて癌に立ち向かって参ります。患者さんおひとりおひとりにとってベストな治療は何か?　毎週激しく議論を重ねています。

また、われわれはとくに難治癌の手術･治療を得意としています。肝胆膵を専門にする江口 英利先生、井口友宏先生、食道癌･胃癌は伊藤修平先生、小生の担当である大腸癌と併せて、すべての消化器癌に対応しています。また、高齢の患者さんも少なくないことから根治性の追求と同時に患者さんへのご負担をできるだけ逓減するために可能な限り「鏡視下手術」を行っています。

乳癌の診療は、私と増田隆明先生が担当です。増田先生は特に米国　NIHにて6年間勉強してきた経験もあり、世界最新の乳癌診療を展開しています。最後に最も若手の林直樹先生は、患者さんの傍にいつもへばりついて頑張ってくれています。

さらに臨床研究は今年は本気で充実していく予定です。とくにプロパゲルマニウムによる乳癌転移再発の予防薬の医師主導治験（共同研究施設：癌研有明病院および国立がんセンター東病院）のほか、癌細胞を光らせて可視化した手術の実用化研究の継続、PLS3など遺伝子診断やゲノム診断（体細胞変異と遺伝子多型）による経過観察、脂肪幹細胞による乳房再建および高齢者のための再生手術の再興です。

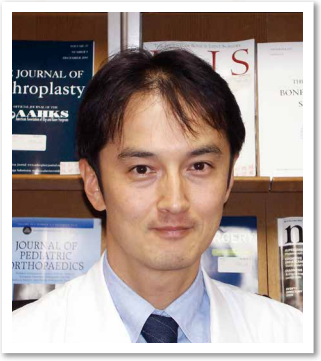
今年もまた、われわれのスローガンである、“難治だから諦めていた笑顔を取り戻す”ためにも、外科チームはひとつになって頑張りたいと思います。今年もよろしくお願いいたします。

診療科長あいさつ

整形外科

九州大学病院別府病院
整形外科・科長

土　井　　俊　郎



新年あけましておめでとうございます。

九大別府病院に整形外科が開設されて５年が経過しようとしています。整形外科は脊椎外科に特化した診療を続けてまいりましたが、今年も昨年までと同様に首や腰などの疾患に対する診療を続けていく予定です。

2012年に整形外科を開設するにあたり、九州大学病院としてどのような医師を別府病院に派遣するかが議論され、別府･大分地区で必要とされている専門医師を派遣すべきだということで、脊椎外科専門医が選ばれました。

具体的な担当分野は、首や腰など脊椎の障害で困っている患者さんです。病気としては、腰部脊柱管狭窄症、腰椎椎間板ヘルニアに代表される腰椎疾患や、頚椎症、靱帯骨化症などです。基本的には良性疾患であるため、投薬を中心としは保存療法で治療することが多いですが、必要に応じて手術を行っています。手術は、脊髄モニタリングや内視鏡、顕微鏡などを導入し、低侵襲手術を中心として年間約250例を行っています。

九州大学の高い医療レベルをそのまま別府に還元するべく、安全第一を心がけた治療を今年も行っていく予定です。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

診療科長あいさつ

放射線科

九州大学病院別府病院
放射線科・科長

平　川　雅　和

年頭にあたり一言ごあいさつを申し上げます。旧年中は格別のご厚情を賜り、誠にありがとうございました。本年もよろしくお願いいたします。

さて、私ども、九大別府病院放射線科は、画像診断はもちろんのこと、血管内治療をはじめとしたIVR、消化管内視鏡検査・治療および放射線治療と、幅広い放射線診療を4名の放射線科専門医で、昨年同様行っております。

私ども別府病院は、三森病院長の「難治であるためにあきらめていた笑顔を取り戻す病院」をキャッチフレーズにしており、手術や全身化学療法に耐えられない患者さんに対しましても、IVRや内視鏡治療、放射線治療の技術を駆使して、可能な限り病変のみにターゲットを絞った低侵襲治療に力を入れております。特に、放射線治療に関しましては、大分県では、数少ない2名の常勤放射線治療専門医が在籍し、前立腺がんに対して強度変調放射線治療（IMRT）や肺がんへの定位放射線治療の高精度放射線治療はもとより、様々な悪性腫瘍に対する、根治的治療から、除痛をはじめとした症状緩和のための緩和照射を行っております。御紹介いただく先生方はもとより、患者さんにも、放射線治療の可能性や治療効果、低侵襲治療が、認識されつつあると実感させていただいております。我々放射線科医も益々、その責任の重さを痛感すると共に、日々の診療から、更なる精度の高い、低侵襲治療のために研究、研鑽を怠ることのないよう身の引き締まる思いであります。また、昨年度より、放射線科の病床を受け持たせていただいており、各診療科の応援を得ながら、より良い放射線診療を提供させていただけるように努めております。

別府市は、高齢化社会さらには、超高齢化社会を迎えており、別府病院には、多くの80歳以上の患者さんを御紹介いただいております。本年も、御高齢の患者さんには、身体への負担を、極力抑えた画像診断をはじめとして、低侵襲な治療を提供できますよう努めてまいりますので、何卒よろしくお願いいたします。

診療科長あいさつ

麻酔科

九州大学病院別府病院
麻酔科・副科長

大　庭　由宇吾

新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり一言ご挨拶申し上げます。

当科では、昨年1年、手術後の患者さんの傷の痛みをできるだけ軽くすることを目標に2つの新たな手法を取り入れました。①消化管手術などでお腹に大きな傷ができる患者さんのために、PCA（患者調節鎮痛法patient controlled analgesia）を開始しました。この方法では、患者さんが痛みを感じた時、手元にあるボタンを自分で押すと、一定の薬が追加投与される仕組みになっています。痛みが強くなる前に、ちょうど良いタイミングで薬を投与できるため、痛みを感じる時間が短くなります。②乳腺手術の後に手術の傷の中で局所麻酔薬を注射する方法を始めました。胸の傷の部分、わきの下の傷の部分、胸の中の筋肉の部分にまんべんなく痛み止めの効果が表れるため、これまでの方法よりも術後の痛みを小さくすることができました。

今年は、手術の前の患者さんの心の痛み（不安や心配）を少しでも軽くすることができるように努力したいと考えています。手術の前、患者さんはそれぞれいろいろな不安を持っていらっしゃいます。例えば、「手術の間しっかり眠っていられるだろうか？」「手術が終わったら目が覚めるだろうか？」「手術の後、麻酔が切れたら、強い痛みがあるのではないだろうか？」そのような質問を術前診察でよく尋ねられます。ほとんどの質問は、その場ではっきりと答えられるもので、そのようにすると患者さんはとても安心した笑顔を見せてくださいます。不安や心配のほとんどが、未知の状態への恐れであるようです。術前診察では患者さんの不安に耳を傾ける時間をしっかりとるように心がけます。

麻酔科医は痛みを取り除くのが仕事です。手術中だけではなく、手術の前後も患者さんに快適に過ごしていただけるよう、本年も精一杯尽力していく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

九大別府病院
リハビリの歴史
vol.1（全3回）

温研が誇ったフランス人飛行家
― 日仏を結んだ大空の縁 ―

九州大学医学歴史館学芸員　赤司　友徳 先生

四　月　十九日外科診療事務開始式ヲ擧行シ、外科部ノ事業ヲ開始ス。醫學部講師串崎俊郎博士主任タリ。
六　月　三十日財團法人和田熊幸會寄附ノ學生研究室（木造平家建三十三坪餘）二月十二日起工本日竣工ス。
十　月　三十一日第五回本所創立記念祝賀式ヲ擧行ス。
昭和十二年
一　月　三十一日看護婦寄宿舍（木造二階建一部平家建、建坪四十三坪餘、延坪七十三坪餘）「レントゲン」室（木造平家建四十五坪餘）同渡廊下（木造平家建二坪）去年九月八日起工、本日竣工ス。
二　月　六日佛國飛行家**アンドレ、ジャピー**骨折後ノ膝關節强直治療ノ爲メ入院ス。
三　月　十三日本館内「レントゲン」室ハ新築建物ニ移轉ス。
十九日**ジャピー**全治退院ス。
五　月　七日九州帝國大學總長荒川文六來所シ視察セラル。
十　月　三十一日第六回本所創立記念祝賀式ヲ擧行ス。

『温泉治療学研究所案内』
（九州帝国大学温泉治療学研究所、1941年、6頁。
九州大学大学文書館所蔵）

この史料は1941（昭和16）年に発行された『温泉治療学研究所案内』の一部です。「案内」とはありますが、九州帝国大学温泉治療学研究所（現九州大学病院別府病院。以下、温研）の施設概要を記した年次報告書のようなもので、年表の1937（昭和12）年の箇所には、太字で強調された「アンドレ、ジャピー」入退院の記事がひときわ目立ちます。同年5月の九大総長荒川文六の視察や、ここでは引用していませんが、1932（昭和7）年に同じく温研で療養した大分出身で後に外務大臣をつとめる重光葵ら著名人であっても、強調されていないこととは対照的です。

記事に登場する「アンドレ、ジャピー」とは一体、何者なのでしょうか？

ジャピーは、1936（昭和11）年11月にパリ―東京を100時間以内で飛行するというフランス政府による懸賞金レースに挑み、パリ―ハノイ間までは当時の世界レコードを樹立しながら、東京までわずかのところ、背振山中に墜落したフランス人飛行家です。彼を遭難から救った背振の村人や彼が入院した九大病院関係者との友情物語は「アンドレの翼」として語られ、日仏交流の歴史にひとつの花を添えています。

11月19日、ジャピーはゴール目前のところ、背振山中に墜落してしまいました。機体の惨状からは奇跡的と言ってよいでしょうが、左大腿部骨折ですみました。それでも重傷であったため、翌日、九州帝国大学医学部附属医院に搬送されまし

「九大附属医院で療養中のアンドレ・ジャピー」
『アサヒグラフ』1951年新年号（Wikimedia Commonsより）

た。そして27日、整形外科学神中正一教授立ち会いのもと、第二外科後藤七郎教授の執刀で接合手術が行われました。術後は順調に快復し、硬直した膝関節のリハビリのため別府の温研に移ることになりました。温研で一月半ほどゆっくり養生したジャピーは、3月19日に退院し、その足で、脊振村および九大医院の人々に完治の報告と感謝の意を表しに行きました。ジャピーの事故と彼と九州の人々との交流は逐一各紙に報道されたこともあり、彼が博多駅から東京へ出発する際の見送りは非常に盛大なものでした。

さて、ジャピーはなぜレースに参加したのでしょうか。その背景を少し探ってみましょう。第一次世界大戦に華々しい活躍を見せた飛行機はその後、大きな発展を見せ、本格的な実用化がなされ、上流階級の人々による旅行のための旅客機や郵便運送などに使われるようになっていました。フランスは当時、国を挙げて航空産業に力を入れており、自国の産業育成もかねて国際航空レースをしばしば開催しました。若き飛行家たちは栄誉を求め、こぞってレースに参加しました。例えば、『星の王子様』で有名なサン・テグジュペリは、1935年にパリーサイゴン間の懸賞飛行レースに参加し、リビア砂漠で墜落したことが知られています。アンドレ・ジャピーもこうした背景のなかで、パリー東京間のレースに参加したのでした。

このような航空機産業の育成とその性能を国際的にアピールする試みは、もちろん日本でも行われました。朝日新聞社は「神風号」による東京ーロンドン間の飛行（当時の名称で「亜欧連絡記録大飛行」）を計画中で、ジャピーの挑戦に当初から注目していました。事故後も九大医院や温研での療養の様子をインタビュー記事等で熱心に追いかけます。退院後、ジャピーは朝日新聞社に招かれ、「神風号」の操縦士に飛行ルートの地図を贈り、様々なアドバイスを授けました。ジャピーからの貴重な情報を得た「神風号」は、驚異的な国際レコードを樹立して、ロンドン市民を始め、欧米の航空界から喝采を浴びました。偉業をなし遂げた「神風号」は、ロンドンを離れ、帰国していたジャピーのもとに向かいます。航空機先進地のフランスでも大きな歓待を受けた「神風号」は、ジャピーに成功を報告し、ジャピーは「合理的正確さに敬服」すると、彼らの快挙を称えました。

このようにして、アンドレ・ジャピーというフランスの飛行家は、九大附属医院と温研を介して、日本と大空の縁をむすびました。冒頭に挙げた史料『温研案内』がこのフランス人飛行家を強調して記していたのは、温研がこうした交流に貢献したことをつつましく誇ったことの表れかもしれません。

「神風号」（Wikimedia Commonsより）

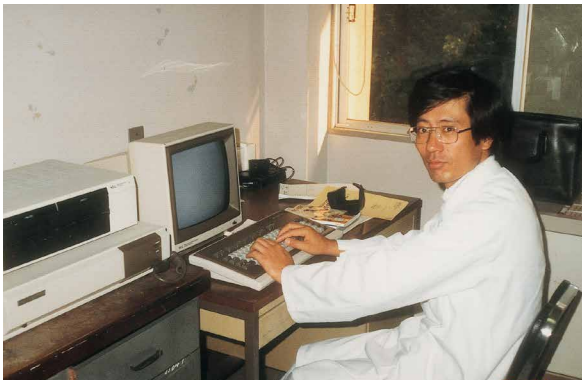
vol. 3 「おんけん同門会」“あの頃と今”

「多くの方々に支えられて37年余」

大分県社会保険審査委員会
審査委員長　医療顧問
安田　正之

2年間の出張生活をとの命令で昭和53年春に九州大学第3内科より温研内科に赴任しました。1年前に妻と長女と温研を見に来た時に妻がすっかり気に入ってしまい、官舎だけは避けたいと思っていましたが子供のためにはここが最良との妻の言葉、2年も終わりの冬にたまたま立ち寄った開発中の団地の一角をひょっとして将来･･･と購入して今日に至ります。

当時は、内科、気候内科、外科、産婦人科、皮膚科、理科からなっていました。現研究棟奥は原生林のままでしたが諸所にモニターカメラが設置され、人工気象室があり、気候内科から毎年南極越冬隊に医局員が参加し、お土産は10万年前の氷･･･といったかなりユニークな環境を持っていました。昭和42年の学園紛争の間は医学部が機能しなかったため、多くの研究費が回ってきたのであろうと想像します。



1982年　最新鋭のN-88でBasic言語により統計のプログラムなど作っていました。

私が赴任した時には既に転出されていましたが、自らの将来を開拓すべく、昭和47年卒の大塚氏、大石氏、市丸氏　昭和48年卒の光山氏、山根氏といった後に教授となり医学をリードすることになった新進気鋭の医師たちが集まっていました。

県内には大学･研究施設は温研しかなく、研究はもとより臨床にも随分頑張りました。リンパ管造影やカテーテルを自作しての血管造影など、九大では専門科しか不可能と思っていた検査もやりました。骨髄生検は九大第一号で、後日九大病院まで出張デモに行きました。

温研は昭和6年に創立されました。恐らくは、温泉治療学を海外派遣に･･･との目的もあったろうと想像します。昭和56年には50年間の温泉研究は終了したとされ、記念誌が発刊され、生体防御医学研究所として将来の研究方向を模索する困難な時期が始まりました。私が赴任した昭和53年は、首脳陣たちによる将来計画が検討され始めた時期であったろうと思われます。

忘年会でしょうか？本村助教授の時代です。

九州大学からの研修医第一号として樋口君が加わってくれました

外科は手術の侵襲と生体反応の研究を発展し、内科は矢野前教授から始まったリウマチ学へと変更され、温泉はリハビリテーションの手段としての新たな評価に挑んでいました。気候内科ではコンピューター解析による生理学の取り込みとして、心電図の自動解析や脳波と生体リズムの関連などが検討され、婦人科は温泉研究からの離脱、皮膚科は従来通りの温泉と皮膚疾患の治療を追い求めていました。理科は講座が廃止され、大学本部へと吸収されました。

「温泉治療学研究所」である以上、医科学として温泉を研究することはその最大の命題であり、結果として「温泉は温泉であり、それ以上でもそれ以下でもない」との結論に至ったと理解します。医科学としてはそれでよいと信じます。しかし、別府の地への「温泉地療法（治療ではなく）」としての有用性を十分にアピールしてこなかったことは大きな失敗であったと思います。地元への還元を忘れた･･･との批判を避けることはできません。

延永教授とハルビン医科大学への
研究交流訪問

温研からは多くの医療界のトップが羽ばたいてゆきました。大分県医師会長畑氏、吉川氏、杉田氏、嶋津氏、新森氏、織部氏達を世に送り出しました。学術担当理事は温研からとの不文律のため、私もいきなり学術担当理事として吉川･杉田体制に加入しましたが、全く知らない世界を経験させていただき、感謝に堪えません。国立別府病院退職後の臼杵市医師会立コスモス病院長への転出や今春から社会保険診療報酬支払基金大分支部に勤務していますが、当時まだ若かった大分大学医学部教授の方々や事務の方々からの御支援をいただいていることも医師会の諸先輩の御指導の賜物に他なりません。

社保審査委員長･医療顧問としてのモットーは、「社保審査会は、国保 審査会、医師会、歯科医師会、薬剤師会との連携を心がけます。私たちの前にいる医療人と何よりも患者たちに配慮することを忘れることなく、Patient-oriented Judgementを心がけて行きます」です。

Topics 採用医師の紹介

消化器外科・乳腺外科

林（はやし）　直樹（なおき）

平成27年7月より九州大学病院別府病院外科に赴任いたしました、林直樹と申します。私は鹿児島県出身で、平成21年に鹿児島大学医学部を卒業後、初期臨床研修は鹿児島大学病院を中心としたプログラムで行い、平成23年に鹿児島大学消化器・乳腺甲状腺外科へ入局、これまで鹿児島県内のいろいろな病院で勤務させていただきました。この度、三森功士先生より機会をいただき、当院で勤めさせていただくこととなりました。

鹿児島県での生活に慣れている私にとって、別府市に移り住んでからまず初めに感じたのは、気候の違いでした。鹿児島なら蒸し暑く寝苦しいような時期でも、ここでは涼しく過ごしやすく感じています。別府は温泉が多く、冬を迎えて寒さが深まるこの頃、温泉で体を温めるのは楽しみの一つです。

私は消化器外科や乳腺外科の診療に従事しております。例えば、鼠径ヘルニアや胆嚢結石症などの良性疾患の他、胃がん・大腸がんなどの消化器がん、乳がんといった悪性腫瘍についても診療を行っております。がんの治療方法としては、根治性を目指した手術、抗がん剤や分子標的治療薬を用いた化学療法、放射線治療の他、乳がんではホルモン療法などもあります。　がんを発症された患者さんは、現在の疾患の状態やどのような治療法があるのか、治療に伴うリスクや今後どのような経過が予想されるかなどについて、大小の差はあるかもしれませんが、それぞれ不安を抱えていらっしゃると思います。そうした不安に耳を傾け、疾患の状態や考えられる治療方法について十分に説明し、患者さん本人が安心して治療を受けられることを常に念頭に置きながら、誠心誠意診療を行ってまいります。

どうぞよろしくお願い致します。

第11回「おんけん症例検討会」を開催しました。

昨年の10月26日(月)に、第11回おんけん症例検討会を、開催いたしました。

前半は、内科からの一般講演で、①「パルボウイルス感染症を契機に発症した関節リウマチの一例」(柏戸佑介医師)、②「骨髄異形成症候群(MDS)による貧血への治療」(伊藤能清医師)、③「胃型腺腫の一例」(瀧澤延喜医師)の講演を行いました。

後半では、①「当院における内視鏡診察」と題して、放射線科の坂本勝美医師より、②「食道治療と今後の展望」と題して、外科の伊藤修平医師より、2つの特別レクチャーを行いました。今回は、当院の視聴覚ホールにて開催をいたしまして、先生方には、交通の面など、大変ご面倒をおかけいたしました。

次回は、ホテル白菊にて、平成28年2月25日(木)に開催する予定にしております。これからも、この会を別府のより良い医療に還元しうるよう、また先生方の有意義な勉強会となるよう努力してまいります。コンサルト症例などありましたら、当日の持ち込みも歓迎いたします。また日本医師会生涯教育単位も取得可能でございますので、多くの先生方に参加していただきますようお願い致します。

クリスマスコンサート

12月15日(火)、外来ロビーで『クリスマスコンサート』を開催しました。

演奏は、別府大学短期大学部の藪奈穂美さんのピアノと別府大学吹奏楽団の学生さんのクラリネット4重奏で、「きよしこの夜」「手紙」「ジングルベル」のクリスマスソングや「クラリネットこわしちゃった」の曲を患者さんと学生さんなどと一緒に歌ったり、とても素敵なメロディーで、一足早いクリスマスの雰囲気を楽しみました。

(文責・檜垣　俊夫)

九州大学病院別府病院　外来診療案内

（平成28年1月1日現在）

科名	診療区分	月	火	水	木	金
内科	リウマチ膠原病 骨粗しょう症	堀内孝彦 木本泰孝	堀内孝彦 前川真貴子 塩沢俊一	木本泰孝 柏戸佑介 塩沢俊一	病棟回診日	堀内孝彦 木本泰孝 前川真貴子
	糖尿病	小柳雅孔 柏戸佑介	前川真貴子	――		小柳雅孔 前川真貴子
	血液病	――	伊藤能清	伊藤能清		伊藤能清
	腫瘍性疾患	田村真吾	田村真吾	――		――
	消化器疾患	瀧澤延喜	田村真吾	――		瀧澤延喜
	循環器・呼吸器	樋口義洋 小柳雅孔	樋口義洋 （新患のみ）	樋口義洋 小柳雅孔（第1･3）	小柳雅孔 （予約のみ）	小柳雅孔
	老年病	前田豊樹	前田豊樹	前田豊樹	前田豊樹	――
	睡眠時無呼吸外来	小柳雅孔	樋口義洋	樋口義洋	小柳雅孔	小柳雅孔
	禁煙外来（全予約制）	担当医	担当医	担当医	担当医	担当医
外科	一般 消化管 肛門	三森功士 江口英利 伊藤修平	手術日	三森功士 伊藤修平 井口友宏 林直樹	手術日	三森功士 江口英利 井口友宏
	肝・胆・膵	江口英利		井口友宏		江口英利 井口友宏
	乳腺	三森功士 増田隆明		三森功士 増田隆明		三森功士 増田隆明
麻酔科	疼痛外来（全予約制）	手術日	手術日	手術日	大庭由宇吾	手術日
整形外科	脊椎外科 （全予約制）	手術日	土井俊郎 東野修 樽角清志 大野瑛明	手術日	土井俊郎 東野修 樽角清志	手術日
放射線科	放射線治療	寺嶋広太郎	寺嶋広太郎	――	寺嶋広太郎	――
	放射線画像診断	平川雅和	坂本勝美	平川雅和	平川雅和	平川雅和
共通	上部消化器内視鏡	江口／齋藤	坂本勝美	坂本勝美	坂本勝美	瀧澤／田村
	下部消化器内視鏡	坂本／齋藤	坂本勝美	坂本勝美	坂本勝美	瀧澤／田村
	EMR/ESD	坂本／瀧澤	坂本勝美	坂本勝美	坂本勝美	坂本／瀧澤
	ERCP	――	――	――	――	――
	セカンドオピニオン	要予約				

※担当医は変更となる場合がありますのでご了承ください。

初診・再診の受付時間 8:30～12:00

・整形一完全予約制：地域医療連携室へ要Tel　・放射線治療一初診 8:30～11:00
・麻酔一完全予約制：地域医療連携室へ要Tel（H28.1月より木曜日に変更になります。）

※但し土日、祝祭日は休診（急患は除く）代表電話：0977-27-1600、地域医療連携室：フリーダイヤル：0120-272-518、直通：0977-27-2055

地域医療連携室より 問合せ先ご案内

◆CT・MR・骨密度・内視鏡検査のご依頼

放射線科受付 0977-27-1722（直通）

・検査依頼は、電話にて受け付けております。依頼検査優先時間帯を設けています。
・結果は、CDデータ、報告書とともに、ご依頼いただきました先生方へ迅速にお返事いたします。

◆放射線治療のご依頼

地域医療連携室 0120-272-518（専用）
0977-27-2055

・乳癌、食道癌、肺癌、前立腺癌、悪性リンパ腫、癌性疼痛に対する緩和治療、その他の悪性腫瘍についてはご相談ください。
・放射線治療の診療は、事前に連絡をいただければ、待ち時間が少なくなるよう配慮させていただきます。

その他、外来・入院に関するお問い合わせ

月～金　8:30～17:00　0120-272-518（専用）
TEL：0977-27-2055（直通）　FAX：0977-27-3008（24時間受信可）

九州大学病院別府病院
Kyushu University Beppu Hospital
〒874-0838　別府市大字鶴見字鶴見原 4546 番地
代表　TEL 0977-27-1600
URL　http://www.beppu.hosp.kyushu-u.ac.jp/